

【2024 年度】国内研修報告書

教育学部教育学科
准教授 遠藤 純

- 研修期間：2024 年 4 月 1 日 ～ 2025 年 3 月 31 日（1 年間）
- 研修機関：白百合女子大学児童文化研究センター
- 指導教員：浅岡靖央・人間総合学部児童文化学科教授（児童文化研究センター長）

2024 年度、研修期間中に行った調査・研究は以下の通りである。

【研究テーマ】

1. 近代日本における口演童話の成立と発展に関する歴史的研究
2. 明治以降の絵葉書に見る児童文学・児童文化の研究—巖谷小波旧蔵資料の分析—
3. 明治期児童雑誌における口絵・挿絵の研究 —文と画の関係—
4. 高尾亮雄（楓蔭）の研究 —近代日本における口演童話および児童劇からの考察—
5. 児童文学研究に関する資料の整備 —ビブリオグラフィーの整理と公開—

上記研究のために、国内関連施設にて資料調査を行った。主な調査内容（機関名および概要、順不同）を以下に示す。

【調査機関および概要】

1. 白百合女子大学児童文化研究センター
富田博之記念文庫における「児童演劇関係資料（明治期）」をはじめ、「口演童話」および「児童文化」等の関連資料を調査・閲覧
2. 国立国会図書館
明治期の社会主義関係諸雑誌、および関西地域の地方誌（紙）の調査・閲覧
3. 国文学研究資料館
明治・大正期の児童雑誌の清刷を調査・閲覧
4. 博文館新社資料室
明治・大正期の児童雑誌における肉筆画の調査・閲覧
5. 大宅壮一文庫
新聞社関係資料の調査・閲覧

6. 東京大学法学部附属明治新聞雑誌文庫
婦人教育雑誌関連の調査・閲覧
7. 大阪府立中央図書館国際児童文学館
児童雑誌における挿画関係資料、および口演童話関係資料、メディアイベント関係記事の調査・閲覧
8. 同志社大学附属図書館および社史資料センター
同志社大学および同志社関連の諸学校の社史、発行物等の調査・閲覧
9. その他
関連する調査内容に応じて、国内のさまざまな機関・団体・個人への調査・ヒアリング等を実施した。

【研究成果】

資料調査・研究の成果は、以下の紀要類や学会にて発表した。

1. 「『小国民』（学齢館）および『少年世界』（博文館）における口絵—明治 28～30 年の掲載内容—」（日本児童文学学会第 63 回研究大会シンポジウム、2024 年 12 月 1 日）

戦後、東京都美術館館長を務めた美術教育家・杉山司七は、明治二八年の『小国民』に掲載された高橋太華の歴史物「島津義弘」に添えられた小堀鞆音の画を取り上げ、〈先生の挿絵は高橋太華氏の歴史物語等を紙上に躍如たらしめ、物語の挿絵といふよりは先生の絵に対して太華氏が解説されたとも言へるものであつた〉と述べている。文は、画ができてから創られていたのである。この時期の文学において、画と文の関係、位置付けや意味付けは、いぶん現在とは異なっており、こうした問題について、近代文学においては近年「画文学」という視点からの問い直し・捉え直しが進んでいる（出口智之氏らの研究による）。

児童文学ではどうであったのか。この問題を考えるにあたり、まず前段階として、当時の児童雑誌に、どのような画が掲載されたのか、一定期間における口絵の資料調査を行い、その概要を報告した。

対象誌は、『小国民』および『少年世界』で、両誌を選択した理由は、

1. 『小国民』が画で当時最も存在感を発揮し、読者の支持を得ていたこと。
2. 『幼年雑誌』で苦戦していた博文館は、すべての児童雑誌や図書群を整理し、満を持して創刊させた『少年世界』で『小国民』を凌駕する必要がある、画で存在感を示す必要があったこと。
3. そのために、博文館は読者に受け入れられる（『小国民』とは異なる）魅力的な画を提示する必要があったこと。

両誌は画で競い合ったと想定される。そこで、当時子どもたちにどのような画が提示されていたのか、両誌に違いは見られたのか、等について分析した。『小国民』や『少年世界』の絵についてはいくつかの先行研究があるが、この両誌について、数年に渡って画を網羅的に調査した報告は管見の限り見当たらない。以上を考えることで、画と文の関係やありようを含め、明治期の児童文学を読む手がかりを得ていきたいと考えた。

調査対象は、『小国民』（学齢館）7年1号（明治28年1月）から9年26号（明治30年12月）までの249点、『少年世界』（博文館）は1巻1号（明治28年1月）から3巻26号（明治30年12月）までの292点、合計541点を分析対象とした。

形式・内容の双方から分析を行い、内容では画全体のジャンル、画家の分布、描かれ方の差異などについて検討を加えた。

結果、考察対象とした範囲に限定されるものの、両誌については対照的とも言える画の特徴を形成している一方で、それぞれの雑誌に固定化した編集ポリシーは感じられなかった。今後、他の口絵のさらなる調査とともに、他誌の掲載画も視野におき、画風や構図、視点など、より多角的に検討していくことを課題とした。なお、本発表をもとに、成果として日本児童文学学会紀要『児童文学研究』第57号（2025年3月31日）に、「雑誌『小国民』（学齢館）および『少年世界』（博文館）における口絵 一明治二八～三〇年の掲載内容一」（単著）を発表した。

2. 「高尾亮雄（楓蔭）の研究（2）ーラジオ放送黎明期における先駆的活動ー」（『大阪国際児童文学振興財団 研究紀要』第38号、2025年3月31日、大阪国際児童文学振興財団）

明治末年から昭和初期にかけて、関西の児童文化運動において重要な役回りを演じた人物に、高尾亮雄（号：楓蔭）がいる。高尾は、大逆事件で処刑された森近運平の片腕として第一次大阪平民社を支え、大阪の社会運動史上に名を残していると言われる。初期社会主義運動、あるいはエスペラント・ローマ字普及運動などの分野で取り上げられることも多いジャーナリスト・演劇人である。

その一方で、児童文化においては明治末年以降、お伽芝居やお伽倶楽部、宝塚少女歌劇、神戸聚楽館女優養成所講師をはじめ、児童雑誌・新聞の編集発行や児童愛護および児童福祉にも関与し、さらには大阪朝日新聞社社員として子ども向けイベントを差配した。お伽芝居の脚本を手がけ、自らも舞台に立ち、子どもの前で童話を語り、さらに紙芝居を実践するなど、大阪を中心とする関西の児童文化運動のあらゆる場面で才覚を発揮した人物として知られている。このように、関西における演劇・音楽・口演童話・雑誌・子ども向けイベントといった児童文化全般に高尾は関わり、昭和初年以降は児童文化運動に関わった口演童話家や関係者の指導者としての役割も一部担った。

このうち、高尾の児童文化運動への参画および活動実態とその内実の分析については、研

究の蓄積が決して十分とはいえない。高尾のあらゆる活動・運動には関連性があり、その柱に幼少期からの宗教的情操の陶冶（佛教およびキリスト教）、および以上に基づく社会福祉分野への関心が大きく影響しているものと考ええる。高尾の業績の分析および検証にあたっては、各分野での足跡を概括し、それらを俯瞰的・横断的に眺めたうえで、高尾の児童文化運動の意味を考える必要がある。

ところで、筆者は高尾自らが書き残した資料を発掘し、高尾が巖谷小波の感化を受け、児童文化の道へ進んだことなどを指摘した。その一方、生没年をはじめ、主たる学歴および前半生となる社会主義運動への関与の実態、新聞記者および雑誌編集者としての活動の内実など、いまだ不明な点も多い。児童文化への関わりも一部明らかにされてきているものの、まだまだ断片的であり、それらを線で繋ぐまでには至っていない。

依然不明な点も多い高尾の活動であるが、このうち本研究では特に高尾の前半期の活動に焦点をあてた。具体的には、これまで指摘されてこなかった高尾のラジオ放送との関わりを取り上げ、大阪朝日新聞社社員として放送メディアにおける先駆的な企画に関与していた点について論及した。日本における公式的なラジオ放送の開始は、JOAK による大正 14 年 3 月 22 日とされるが、それに先駆けること約 1 ヶ月、公開実験放送というかたちではあったものの、関西におけるラジオ放送はすでに始まっており、高尾は大阪朝日記者としてこの公開実験を企画主導したほか、同社の本放送である大正 14 年 2 月 15 日には、放送開始にあたり、まずその第一声を発していた。

当時 46 歳の高尾は、20 代の初め、新聞雑誌記者として活動を開始し、やがて一時期社会主義運動に身を置き、その後演劇へも関わっていく。その後も各紙の記者を転々としながらジャーナリズムの世界で活動を続け、児童文化への道を歩んでいくようになるわけであるが、こうした高尾の歩みに、これまでラジオへの関わりは知られていなかった。が、報道機関社員としての高尾は、関西におけるラジオ放送の歴史にも名を残していたのである。

さまざまなアイデアを駆使してイベントの企画実施を行い、新聞雑誌などを中心として児童文化関係者との豊富なネットワークを築きながら、関西における児童文化活動を牽引した高尾の実績の一端を明らかにした。

3. 「明治以降の絵葉書に見る児童文学・児童文化の研究—巖谷小波旧蔵資料の分析—」

巖谷小波の令孫・巖谷國士氏所蔵の 1,000 通を超える絵葉書類（以下、小波絵葉書とする）には、小波から家族宛ての葉書約 300 通とともに、国内外から小波に宛てて送られた約 700 通の絵葉書が含まれている。1890 年代から戦後に至るまで、長期に渡ってやりとりされた私信には、小波を中心とする広汎な人のつながりは言うまでもなく、児童文学や児童文化をはじめとして、一般文学や演劇、出版、編集、美術、建築、民俗および教育、政治経済、法律、軍事など、実に 500 名を超えるあらゆる分野の関係者とのやりとりが見てとれる。多

方面で活躍し、一時代を築いた小波らしさを反映する、実に壮大な絵葉書コレクションである。これまで詳細に紹介・分析されたことのない書簡であり、その数量と言い、記述内容といい、近代日本の多くの研究分野に影響を与えうる極めて高い資料性があり、明治以降の文化を考えるうえで看過できないものである。

本研究は、こうした絵葉書の内容分析を通して、先行する小波研究と照合・検証を行ってその妥当性を問い直し、正当に評価するとともに、新たな研究情報を追記するものである。

明治 33～35 年にかけての渡独、および渡米実業団（同 42 年）に迎えられて海を渡った小波は、現地で多くの絵葉書を買求め、日々家族や知人、また自身に宛てて送信した。また、明治末年以降、〈舌栗毛〉と称した「口演（講演）」活動を精力的に行い、国内各地を廻った際にも、当地で絵葉書を購入し、口演の様子とともに自らの動静を周囲に伝えている。注目したいのは、当該絵葉書が口演活動（実演）を行った当地から頻繁に出されていたという点である。これは、小波のお伽口演活動の実態を窺い知る資料となると考えられる。

本研究は、以上の認識に立ち、小波が行ったお伽口演を絵葉書を通して考察するものである。資料としては、本人による日記や書簡、小波の動静を伝える当時の雑誌や新聞の記事などがあるが、これら関連する資料を蒐集して読み解き、その記述を照らし合わせて批判的に検証しつつ、実態をあぶり出すことが必要である。上記に加えて、小波の絵葉書を取り上げることで、小波のお伽口演の実態を検証した。

そのために、すべての絵葉書を通読して分類したうえで、日付、差出人、差出地、内容などを翻刻した。このうち、筆者は口演童話関係の記事を重点的に読み解き、主に雑誌等の他資料と突き合わせたうえで、これまでの資料における記述の妥当性などを問い直した。こうした成果は、領域を横断して小波絵葉書を研究する研究会にて発表した（2025 年 3 月 15 日）、成果論文は、今年度中にまとめて発表する予定である。

【謝辞】

2024 年度は国内研修に参加させていただき、教育・研究に集中できる有意義な時間を頂きましたこと、本学院のご関係の皆さま、および所属学科の先生方にあらためて御礼申し上げます。

加えて、白百合女子大学・人間総合学部児童文化学科の浅岡靖央教授には、恵まれた研究環境を与えてくださり、貴重な資料にアクセスできる機会をご提供いただくなど、常にあたたかいご指導を頂戴しました。心より感謝申し上げます。

この機会に学んだことを、今後の教育・研究に微力ながら生かして参りたいと存じます。